

読書会 平成 26 年 1 月 27 日

可児藤吉

——本との出会いで広がる世界——



蒔苗博道

2年ほど前に岳麓新聞の記者の方から、自由なテーマで新聞に短いエッセイを連載してほしいと言われました。何を書こうかと考えて、自分が最も好きなことについて書きたいと思いました。それは本についてです。本が自分の世界をどのように広げてくれているかを書きたいと思いました。連載のタイトルを「一冊の本から」とし、今まで13回書いてきました。そのうちの一つを紹介します。

(第三種郵便物認可) 購読料(消費税込み)1ヵ月620円

岳麓新聞

日曜さろん

新橋

時苗博道

先日、二十世紀の日本を代表する思想家の一人、森有正の「暗く広い流れ」というエッセイ(「森有正エッセー集(成)」所収)を読み直しました。このエッセイの中には森有正が昭和46年に御殿場市の東山荘で行った「新しいものと古いもの」という演題の講演の概要が書かれています。その講演の中で森有正は、当時の日本に見ら

一冊の本から⑦

れた「新しい」傾向として「金と労働の結びつきが分解して、労働の価値が次第に軽くなった。働くことよりも、金が儲かることの方が重大になって来る。あえて言うてみると、快適な生活に対する感覚と要求が目ざめたとも言えるようか」と述べています。これに、この「新しさ」の中には「不安定で軽薄な要素が多すぎる」という言葉が

続きます。今日につながる、時代の軽薄な風潮が昭和40年代の講演で指摘されていることを興味深く思いました。しかし同じ時代の軽さを論じているのであっても今日とは大きく異なる点があります。「暗く広い流れ」という、思想家の難解な講演録を含むエッセイは、当時幅広い愛読者を獲得していた総合雑誌「展望」の12月号に掲載されたので

す。昭和40年代の日本人は、総合雑誌で思想家のエッセイを読みながら年の瀬を過ごしていたことがわかります。「暗く広い流れ」の中で、森有正は、東山荘の入り口に立つサイカチの木を「数百年を経たに相違ない巨大な早荻(サイカチ)の古木。それは老い朽ちた老人のような、実に美しい古木だった」と表現し、その古木の姿

不二聖心女子
学院教諭

「一冊の本から⑦」は森有正という思想家についての文章です。この文章が新聞に載ったとき、新聞の読者の一人の方から連絡があり、森有正の全集を譲りたいと言われました。僕が高校時代に買いたくても高価で買えなかった森有正全集が思わぬかたちで手に入りました。

この連載は、いろいろな人との豊かなつながりをもたらしてくれる大切な連載になっています。今日は次に「一冊の本から」で取り上げたいと思っている事柄についてお話します。

みなさんは日曜夜7時30分からNHKで放映している番組を知っているでしょうか。

「ダーウィンが来た」という番組です。毎週、いろいろな生き物を取り上げて、その生態について紹介している番組です。昨日はアナグマについて紹介していました。その前はニュージーランドに棲むキーウィという鳥について紹介していました。

アナグマやキーウィも含めて、この番組で紹介される動物のほとんどはダーウィンとは何の関係もありません。それでもダーウィンが番組名に使われているのは、彼が世界で最も有名な生物学者であり、生き物を紹介する番組のタイトルにシンボリックに使用するのにふさわしい人物だからです。

では、なぜダーウィンはそんなにも有名になったのでしょうか。一番の理由は彼が進化論をとったことにあります。

生き物は競争に勝ち抜くために、より環境に適したかたちに進化していくとダーウィンは考えました。猿がより環境に適応して強者となったのが人類であって、人類のスタートはアダムとイブではないと公言したのです。キリスト教が支配的であった時代にあって、これは大問題となりました。

「進化論と言ったらダーウィン、ダーウィンと言ったら進化論」と世界中で言われているわけですが、実はもう一人、進化論で有名になった人物がいます。それは今西錦司です。彼は、この世界を支

配するのは「競争」ではなく「調和」だと考えました。

下の2枚の画像を見てください。これは同じ生物の幼虫です。何と言う生物の幼虫か、考えてみましょう。



ヒントは古典の作品のタイトルに登場するある虫です。

答えは「蜻蛉日記」の「カゲロウ」です。成虫は下の写真のような姿をしています。



どうしてこれほど幼虫の姿が違うのでしょうか。

1枚目のドリルのような姿のカゲロウの幼虫は、川底の砂に潜るという生き方を選択しました。2枚目の平たい姿のカゲロウの幼虫は川底の石の裏につくという生き方を選択しました。この両者は、棲む場所を別にする事で競争せずにそれぞれが平和に暮らしています。このような生き物の生活の仕方を「棲み分け」と言います。今西錦司は、生き物はそれぞれがそれぞれの属する環境に適した生き方を身に付けるように進化したと考えたのです。世界を支配するのは「競争」ではなく「調和（ハーモニー）」であるという考え方です。

進化論の前に固有名詞がつくのは、世界におそらく二人だけで、それはダーウィンと今西錦司です。今西錦司は棲み分けの進化論を発表することで日本を代表する生物学者になっていきました。

ところでこの今西錦司に「人間だけはこの調和を壊す存在ではないか」と質問した若者がいました。それは現静岡県知事の川勝平太知事です。川勝知事は「今西錦司翁との一期一会」(『富国有徳論』所収)という文章の中で次のように書いています。

人類は生物全体社会のなかで「棲み分け」原理を破る存在だとの私の主張に、眼球の奥の方を動かされながら、「それは違います」と答えられた。

この今西錦司の本を1ヶ月ほど前から僕は集中的に読んでいます。読んだ本の中の一冊、『人間以前の社会』(岩波新書)の序文の一節がその後の僕の読書生活に大きく影響を与えることとなります。それは次のような一節です。

わたくしは本書を、サイパンで戦死した一人の友人にささげる。可児藤吉——かれのように熱烈な批判と、誠実な助言とを惜しまなかったひとを、わたしはふたたび見いださうであろうか。彼なくして、いまわたくしの学問の道はさびしい。

日本一の生物学者、今西錦司をして「彼なくして、いまわたくしの学問の道はさびしい。」と言わせる可児藤吉とは、いったい何者なのか、という問題意識が僕の中に生まれたのです。先ずはウィキペディアを見てみました。

◎「可児藤吉」についての説明

可児 藤吉（かに とうきち、1908年1月1日 - 1944年7月18日）は岡山県勝田郡勝間田町（現・勝田郡勝央町）に生まれた日本の先駆的な群集生態学者。京都大学農学部卒。河川の蛇行と、河床形態である瀬と淵に注目し、「河川形態型」を提唱した。また、昆虫が生息するそれぞれの環境を研究することで今西錦司とともに「棲み分け理論」の基礎を築いた。河川形態型を発表した同年、太平洋戦争において36歳という若さでサイパン島にて戦死した。

これしか情報がないのです。写真もありません。僕は何とかしてこれ以上の情報を得たいと思いました。いろいろ調べていくと、彼が「賀茂川の水温同時観測の記録」という調査記録を残していることがわかりました。これは賀茂川の16キロにわたる流れの中の4地点で1時間ごとに水温を同時にはかるという調査です。徹夜で水温をはかるのですから、たいへん厳しい調査です。この調査によって、賀茂川の水温環境の違いが総合的に明らかにされるはずだという考えを可児藤吉は持っていました。しかし、いくら彼に意欲があってもこの調査は一人ではできませんでした。1935年頃の話ですから、自動記録装置のようなものも存在しません。すべて人間の力で行わなければならなかったのです。彼があきらめかけた時、彼の研究の意義を認めた友人たちが徹夜の調査への協力を申し出ました。以下の8人です。

- 1 小田柿進二
- 2 森下正明
- 3 内田俊郎
- 4 渋谷寿夫
- 5 黒田松雄
- 6 田中淳雄
- 7 深田侃
- 8 清久正男

これだけの友人が徹夜での協力を申し出たのです。可児藤吉はそれだけ人望のある人物だったと言えるでしょう。僕はますます可児藤吉のことが知りたくなりました。いろいろ調べていくと可児藤吉のことが『山への旅』（アディン書房）という本に詳しく書かれていることがわかりました。絶版で手に入りにくい本でしたが、北海道の書店に一冊あることがわかりました。早速注文しました。

この本の中には可児藤吉を知る上でとても役に立つエピソードがたくさん書かれていました。その中の一つにサイパンの出発する前に牧野文子さんの家に可児藤吉が泊った時のことが書かれていました。

可児藤吉は戦場にある物を持っていこうとしたのです。そして牧野さんはその「あるもの」を入れるための袋を可児藤吉のためにすぐに作りました。その「あるもの」とは鉛筆三十本です。可児藤吉

は次のように言ったそうです。

どこへ、どんな島へ行くのかしれないけれど、そこでまた何か出来ることを勉強しよう、ノートと鉛筆だけはうんと持って行くのだ

戦場に鉛筆を持っていった可児藤吉の勉強への情熱に僕は感動しました。そしてますます可児藤吉について知りたくなりました。鉛筆三十本を持っていった可児藤吉は、サイパンでどのように生き、どのように死んでいったのか、知り得る限りのことを知りたいと思いました。

可児藤吉はサイパンで 1944 年 7 月 18 日に亡くなります。サイパンでの戦争の歴史を調べていくと 1944 年 7 月はサイパンの戦史にとって特別な月であることがわかりました。1944 年 7 月 7 日に世界史上、まれにみる愚かな作戦が実施されます。当時サイパンにいた日本兵のほぼ全員の約 4000 人が兵力において圧倒的にまさるアメリカ軍に万歳を叫びながら突入していくのです。この中に可児藤吉が含まれていた可能性は高いと思われます。竹野内豊主演の『太平洋の奇跡』という映画にはこの時の戦いの様子が描かれています。

この「バンザイ攻撃」で重傷を負った可児藤吉が約 10 日後に死亡したのではないかと僕は想像します。

牧野さんは可児藤吉戦死の知らせを聞いて追悼の文章を書きました。

昭和二十年九月二十九日

——暁闇に月貌冷たく、明けの明星鋭く光るのを、まともに東の空に見て、急に目がはっきりさめてしまう。(中略)私を描いてもらった絵の入れてあった額をはずし、それに、かつて四子さんがコンテで描いた可児さんの肖像画(『可児藤吉全集・全一卷』(思索社一九七〇・一九七八年刊)の口絵として使用されている)を、直ちに出示してもらって入れ替える——背から首筋にやや力を入れて、幾分うつむき加減の姿勢、じっと一ところを見詰めて瞳を上げている顔、並んだ細い額のしわにどこか暗さを浮かべる陰がさし、唇の左端にいつもの癖でパイプをくわえている——ワイシャツにネクタイの七分横向きの上半身。今にもパイプをくわえたままで下唇を開いてものをいいそうな、あの、なつかしい可児さん、私たちのお仲間、可児藤吉さん！ そこにすわって、その姿勢で、仲よく話し合うことが出来たのは、もう帰らない過去になりました。あなたのような敬愛する友を持つことができた私たちは、本当に仕合わせでした。あのあなたの好きな御岳山に、一緒に登った十日間の旅のことを思い出します。徳田さん森下さんも一緒でしたね。みんなが落ち合う前に、私たち二人が木曾福島駅の着くのを迎えて待っていて下さったときにも、パイプを口にくわえて改札の柵に、その姿勢、そのまなざしで、私たちの姿を見付けると、にこっと微笑んだかと思うと、その次の瞬間、とても嬉しそうに目尻にしわを並べて、一層嬉しそうな笑顔をみせたあなたでした。(中略)それから始まった御岳山行の十日間のことを、ことの外なつかしくあれもこれも思い出します。私はこんな日が来ることは知らずに、あの山旅のことをノートに書きました。近くそれを読み返さなくてはなりません。なつかしさが込み上げて来るのです。もうどうしたって会えないというのは打ち消すことの出来ない現実です。声を限りに呼んでいいものだったら、ああ、何一つ術のないことです。あなたとは永遠に、あの日、別れてしまったのでした。

応召後休暇を得て、間もなく船出しそうで一時の別れにと、うちで一泊されて、名残りを惜しみ合ったあの日、どこへ、どんな島へ行くのかしれないけれど、そこでまた何か出来ることを勉強しよう、ノートと鉛筆だけはうんと持って行くのだといったあなたに、黒いラシヤのありぎれで、三十本ばかりもあなたが用意した色鉛筆や黒い鉛筆を入れる大きな鉛筆袋を私は急いでミシンで縫って、あなたに持って行ってもらったあの日は、本当にあなたにさよならしてしまった日なんですね。もう随分食糧が乏しかったけれど、小豆をなんとか手に入れ、森下さんが貴船口の藤崎さんで都合してもらって

来た砂糖で、どうにかお善ざいがたけました。みんな、居合わせた人たちも私たちも二杯ずつ、あなたには三杯食べてもらいました。「うまいわ、ハッハッハッハッ……」と藤吉さんは言いましたね……。肖像画を見ていると、つい話しかけてしまうのである。

ああ可児藤吉という一個人の人間は、この地球上から消えてしまった。「トウキチセガツーハヒマリアナホウメンニテセンシス」の電文を藤吉さんの家から私たちに打電して来た。「可児さん戦死」、これだけのことが、四子さんも私も、二人とも頭の中でぐるぐる回っている。戦争の悪夢が私の胸を締め付ける。後頭部が、きゅーんと痛いのに気付く。晴れた秋の空をちょっと見上げて、わき出す泉のように、悲しみがこんこんとわいて、わいて、止めどがない。ただ親愛の情を抱いているからばかりではない、人間可児藤吉を敬愛していた私たちである。その人となりの麗しさは、たぐいまれな存在であった。謙譲であった。優しくかった。師には恩愛を忘れない人であったし、後進が求めれば所信を説いて導く心掛けがあった。友情にあつく、いつも与える側に立つ喜びを持つ人であった。聡明な頭のいい人というのではなくて、熱情を傾けて勉強するタイプの人であった。つまり勉強が好きだった。その勉強の成果は、素晴らしいものがあるときいている。勉強が人をしのいでいても、どこまでもへり下って他人を損なうということがない。綺麗な行いを終始一貫行って生涯を閉じたのである。美しい人間を、一人失ったというだけでも、戦争は呪われるべきである。

可児藤吉という人を知ることができてよかったと心から思いました。

そして可児藤吉の肖像画を見たいと心から思いました。肖像画は『可児藤吉全集全一卷』（思索社）に掲載されています。全集は 8000 円でしたが、購入を決意しました。次の画像が可児藤吉さんです。



僕が今日の話を通して伝えたかったことは二つあります。

一つは、可児藤吉を知ること、勉強したくてたまらなかったのにそれができなかった人の思いを知ってほしいということです。

もう一つは、一冊の本との出会いを通して生まれた問題意識を掘り下げ、ぜひしてほしい、自分に深い問題意識を抱かせる本とぜひ出会ってほしいということです。

最後に僕の大好きな話を紹介しましょう。

神学者、トマス・アクィナスがパリの町を生徒と一緒に散歩していた時の話です。

先生、ごらんなさい。パリはなんと美しい町ではありませんか？ この町を支配したいとお思いになりませんか？

トマス・アクィナスは何と答えたでしょうか。

私はそれよりもヨハネス・クリゾストモスの『マタイ福音書説教』を手に入れたい。

と答えたのです。みなさんにとっての『マタイ福音書説教』はどの本でしょうか。

ぜひパリの町と取り換えてもほしいと思える一冊の本と出会ってください。

これで読書会のお話を終わります。